

『国際ビジネス形態と中国の経済発展』(中央経済社、2002年刊)

経営学部助教授 杉田 俊明

1. 本書の主旨とその意義

本書は、国際ビジネス形態、とりわけ中国ビジネスにおけるビジネス形態を国際経営戦略の観点から解析し、実証研究を行うものである。

本書でいう国際ビジネス形態、すなわち狭義のビジネス形態とは、企業が発展をはかり、対外事業や国際事業を展開するために選択するビジネス手法のことを指しており、経営のためのビジネスモデルをより具体的に遂行するための直接投資戦略の展開手法と実務的な貿易手法、そしてその組み合わせを指している。

企業は諸ビジネス形態を適切、臨機応変に使用することにより、企業の発展をはかるものである。そして、企業と企業の発展が経済の成長をもたらすものである。

したがって、国際ビジネスの分野において、ビジネスモデルやビジネス形態についての体系化作業や体系的な分析を試みるものとして、本書は経営研究上の意義を有する。そして、ビジネスモデルやビジネス形態の応用が企業の発展や経済の発展をもたらすために、本書は経済研究のための実体経済部分の補完を行うものでもある。さらに、国際ビジネス形態、とりわけ中国ビジネスにおけるビジネス形態を詳細に解析し、ケース・スタディも含め、多くの実証研究を行うものとして、実際の企業戦略と実務にも役立つものとして、その実務的な意義を有するものだと思う。

紙幅の制約上、本書はマクロ経済の分析やビジネス形態がもたらすマクロ的な意味合いについての論議を割愛している。また、理論研究に対するレビューも最小限に止め、企業経営全体のためのビジネスモデル、あるいは経営の戦略や仕組みなどの応用として、「ビジネス形態」に関する議論に徹している。そして、後半においては、「ビジネス形態」を広義に解釈し、特定企業のビジネスモデルに関するケース・スタディを行っている。

そのために「マクロや理論的な枠組みに対する論述は十分ではない」と一部の読者が思われるかも知れない。前掲のように、本書は範囲をあえて限定し、あくまでも「ビジネス形態」とその体系化作業への基盤作り、そしてそれらの戦略・実務の応用についての解明に焦点を置いたものだとして理解をいただきたい。そういう意味においては、本書は本来、対象テーマの体系化、そして今後における本テーマに対する研究の更なる深化を行うための基盤研究だが、経営者、国際ビジネスに実際に携わっている方々にとってもフィットするものだと思う。

2. 本書の概要とその構成

学者の書物について経営者、ビジネスマンから「なぜわざと難解な用語を使うのか」、「なぜ欧米の引用ばかりするのか」と時たま詰問されたりする。筆者は、学者のすべてが「わざと」難解な用語を使用しているとは思わないし、また、研究者の一人として文献研究の重要性を十分に理解している。少なくとも本書では、可能な限り平易な論説と自身のオリジナリティを心掛け、研究者においても、経営者、ビジネスマンにおいても意義のある書

物として、また、一人でも多くの方に本書の内容を理解いただけるように書き方にも努めたつもりである。

本書の第1部においては、まず、国際ビジネス形態の体系化とその諸形態に対する解明が行われている。これは本テーマの研究において、国際ビジネス形態の体系化作業にアプローチするための重要なステップであると同時に、本書第2部の展開のために理論的な背景を提供するものである。

そして、この部においては、筆者による独自の、ビジネス形態の展開における4段階論が説明されている。グローバルビジネスの時代においてはすでに単純貿易や投資だけでは対応できず、トータル・マネジメントとオペレーションが求められ、自社の戦略に応じて、複数のビジネス形態を臨機応変、伸縮自在に取捨選択し、組み合わせて展開できるような、複合ビジネスの形態が求められていることについてこの部は指摘し、論述が展開されている。

理論的においては、これは従来の貿易論や直接投資論、あるいは従来の海外市場参入論などの限界を間接的に問うものであり、新たな理論構築への問題提起と、一つの独自な試みのスタートでもある。

第2部においては、ケース・スタディや応用編として、中国ビジネスにおけるビジネス形態が取り上げられている。中国ビジネスや中国における外資導入の諸形態、その歴史的推移やそれぞれの特徴が詳細に説明されている。とりわけ所有形態（企業類型）別貿易形態などについては統計データの分析に基づき、文書論述よりも分かりやすい図表の多用により詳細に説明されている。ちなみに、このようなデータを使用して所有形態と貿易形態の相関関係を解明した論述も筆者独自のものである。

経営者やビジネスマンの方々は図解や実例の多いこの部分から読み始めても差し支えないと思う。

最後の第3部においては、前掲の第1部や第2部において展開された狭義のビジネス形態の概念とは異なり、広義のビジネス形態の応用例として、中国の代表的な企業のケース・スタディが展開されている。ゼロからのスタート、あるいは倒産に瀕していた企業はいかにして中国最大級の企業、あるいは世界的にも影響力の高い企業に成長し得たのか、そのビジネスモデルや経営システムに対する解明が行われている。

なお、この部分の内容は、初出論文段階で、かなり早い時期においてこれらの中国企業を日本企業に紹介し、日本の雑誌にて詳細、かつ相対的に専門的な分析を行ったものとして、すでに高い関心を集めていたものである。

中国ビジネスに対して関心が高まっているいま、本書の閲読により中国ビジネスの実態に対する把握と、中国・アジアでの経営を理解していただければ幸いに思う。